

閃を狂わすは悪魔の遊 戯盤

RedQueen

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第11分校の一生徒として入学を果たしたシエルは、共に切磋琢磨する《V I I I》の面々と慌ただしくも平穏な日々を送っていた・・・時折見せる彼女の”影”が彼らを絶望の御伽噺へと誘うとも知らずに。

目次

	虚しき英雄譚の序章	v o l . 1
1	虚しき英雄譚の序章	v o l . 1
8	虚しき英雄譚の序章	v o l . 2
14	虚しき英雄譚の序章	v o l . 3
23	虚しき英雄譚の序章	v o l . 4

虚しき英雄譚の序章 v o l . 1

「ふああ・・・んんう」

窓辺の席って、最っ高♡

暖かな日の光に包まれ眠る私ーシエル・コルテスは入学ということで場が静まらない教室でただ一人机に突っ伏して寝ていた。

最初はこれから共にする学友たちに挨拶をと思ったのだが、この快適な状態を崩してまで行うほど重要性は感じられない。

というわけで、

「ふうむ・・・もう一眠りつと」

眠ろう。うん。

意思を固めた私が夢魔に意識を持っていかれそうになった瞬間、

「そろそろ、起きたほうがいいのでは？」

背後から抑揚のない声が聞こえてきた。

私に言ってるのかな。

一応ゆっくりと上半身を起こし、後ろの席へと視線を移す。そこには一人の女の子が

こちらをじっと見つめていた。一瞬で目につく綺麗な銀髪、まだ幼さの残る人形のような整った顔立ち。

うわあ、綺麗な子だな。私が男だったら一瞬で一目惚れしてたかも。

私が振り返って数刻、自分の顔をまじまじと見られていた少女は少し困惑したような表情を見せ、

「私の顔になにかついていますか？」

「うん、ただ可愛い子だなーって見惚れてただけだよ」

「んっ・・・そ、そうですか」

私の返答に一瞬少女は顔を強張らせるが、またすぐに無表情のような顔つきに戻った。

「しっかし、面白くなりそうだな」

辺りを見回していたら、ついふと言葉をもらした。

「面白く、ですか？」

私の発言に、少女は怪訝そうな表情を浮かべる。

「だってさ、見るからに不良そうな子やどこかの令嬢っぽさがある子、君のようにちよつとばかり年が違う子までいる。それだけで、普通とは思えない気がしてね」

「確かに、普通ではないという点では同意しますね」

少女が納得したように軽く頷く。さらに私をじっと見つめ、

「普通ではないと言えば、貴方もそう感じるのですが」

「私が？ どうしてかな？」

私の疑問に少女はなにか考え込むような動作をはさんだが、

「いえ、やはり気にしないでください」

焦らされたほうが気になるけど、まあいいや。

「そういえば自己紹介がまだだったね。私はシエル。シエル・コルテス」

「アルティナ・オライオンです」

私の紹介の後、少女もまた続くように自己紹介を済ます。

アルティナ、か。じゃあ、

「アーたんだね」

「どうしてそうなるのですか」

自身につけられたあだ名に、明らかに不満げな表情を見せるアルティナ。

「え、だって可愛いじゃん」

「可愛いかどうかは別として、アーたんというのは少しばかりー」

キーーン

アルティナが言い終わるよりはやく、アナウンスははじめの音が教室に鳴り響く。そし

てその音が鳴り止むと、可愛らしい声音をした女性が連絡事項を述べてきた。

校舎を出てすぐにある校庭に集まるようにと。

「どうやら時間のようですね」

アナウンスを聞き終わったアルティナが席を立ち、私もつられて立ち上がる。周りの生徒たちも各々に席を立つと、話し声まじりに校庭へと向かう。私も皆の最後尾で歩くアルティナの隣に並び、彼女と些細な会話をしながら列に続く。

創設されたばかりの学園ということもあり、校庭もまたかなり整備されたかのような場となっている。地はすべてコンクリートで埋められており、校庭の端には巨大な格納庫が設けられている。

その中央付近で二列に並んだ生徒たちの後方端に並んだ私は、改めて学友となる生徒たちを確認する。後列の反対側では、先ほどの教室に遅れて入ってきた金髪の女の子が、不安を隠しきれていないのかそわそわとした様子で周囲を見回している。その隣では、腕組みをした水色の髪の少年がじつとじている。そのさらに隣の黒髪の少女もまたじつと校舎や他の建物を見つめている。

「いつまで待たされるんだろ。こんな右も左もわからない難たちを残して、先生たちはなにをしてるんだろ？」

「といつても、着いてから少ししか経っていませんが」

私の眩きに、ななめ前に立つアルティナが答える。

まあ、そうなんだけど。寝起きの私にとつて、(弱)炎天下の中で立ち続けるのはつらいところがある。

うう、もうそろそろ体力低下を自覚する頃合いかな。

そう内心で複雑な思いを巡らせていると、本校舎に続く坂道にふと幾人かの人影が見えた。

周りの生徒たちも彼らに気づきだし、何人かはその人影の正体に驚きを隠せないでいる。

「ウソだろ・・・?」

「なんでこんな所に・・・」

「それを言うなら『黄金の羅刹』がどうして・・・」

まあ、あの面子ならそうなるかな。特に、名だたる軍神と英雄様ときたらね。

教官陣と思わしき数人が生徒たちの目前で立ち止まると、彼らの少し前を歩いていた金髪の男性がこちらに振り向き、

「静粛に! 許可なく囀るな!」

と、厳しい声音で告げてくる。

まさに軍の人間って感じ。苦手一直線だなー。

たった一声で静寂と化した生徒たちを確認し、手を後ろで組んだ男性が続ける。

「これよりトールズ士官学院、《第Ⅰ分校》の入学式を執り行う！ 略式のため式

辞・答辞は省略、クラス分けを発表する！」

クラス分けか。学園人生を左右する重要ごとだよな。

軍人一色の男性の声に耳を傾けつつ他の教官に目を向けると、端に立っていた黒髪の青年がやたらとこちらに視線を向けてきていた。

いや、私じゃないな。彼の目の方向を的確に捉えれば・・・アーたんか。

まさか、私と同じく一目惚れって線。強大なライバル登場って感じかな。

一人勝手に対抗意識を燃やす私とは裏腹に、ライバル（？）の彼がアルティナに向ける眼差しはどこか異様な感じだった。

その後、着々と式は流れ、赤毛の青年が担当する《VⅠⅠⅠ組・戦術科》、小柄な少女が担当する《ⅠⅩ組・主計科》の二クラスが発表され、それぞれに属する生徒たちの名も告げられた。

私とアーたん、そして二人の少年少女を除いて。

それぞれの担当教官のもとに幾人かの生徒たちが集い、呼ばれなかった私たちが若干唾然しているとまたも金髪の男性が式の流れを継続させる。

「これより本分校を預かる分校長からのお言葉がある。では分校長、お願いします」彼の言葉に呼応するように返答した女性が、一步前へと歩み出る。

どこか凄みのある雰囲気を放つ女性に皆の視線が集まる。

彼女の象徴の一つである大剣をなくしてこの威武堂々とした佇まい、まさに牙を隠した獅子。さすが、内戦では常勝無敗を成しあの侵攻を完遂させた鬼將軍だけはあるね。

目の前に立つ女性の武勲を思い出していると、生徒の全員を見回した彼女が、

「《第ⅠⅠ》の分校長となったオーレリア・ルグインである」

と、自身の立場と名を告げる。

「あまり時間がないゆえ、私からは一つ確と言えることを教えよう」

オーレリアの言葉に金髪の男性が怪訝な表情を浮かべるよりはやく、彼女が言い放った言葉に生徒のみならず教官陣も驚きの表情を見せた。

この第ⅠⅠ分校が”捨て石”であると。

虚しき英雄譚の序章 vol. 2

「この第Ⅰ分校は捨石だ。本校に受け入れられない厄介者や曰く付きをまとめて使い潰すためのな」

厄介者に曰く付き、登校初日早々卑下されるなんて、

「おもしろい。やっぱり、無理して来た甲斐があるかな」

思わず笑みがこぼれる。グラウンドに集った皆がざわめく中、一人だけが楽しげにオーレリアの言葉に耳を傾ける。

「だが」常在戦場」という言葉がある。その氣質を学ぶには絶好の場所と言えるだろう」

そこまで語ったオーレリアが一呼吸おき、

「自らを高める覚悟なき者は今、この場で去れ！ 教練中に気を緩ませ、女神の元へ行

きたくなければな」

有無を言わさぬ迫力でそう言葉を放つのだった。

決心によって口を閉ざす者、ただ迫力に押されて狼狽える者、皆それぞれに態度は違うものの彼女の言葉に逆らおうとする者は誰一人としない。皆の意を確認したオーレ

リアは右手を前に掲げ、

「フフリーならば、ようこそ《ツールズ士官学院・第ⅠⅠ分校》へ。『若者よ、世の礎たれ』」かのドライケルス帝の言葉をもって、諸君を歓迎させてもらおう！」

先ほどの分校長の言葉によって式が締めくくられると、ランドルフ教官やトワ教官の元に集った生徒たちが列をつくり、教官が先導するようにしてグラウンドを後にする。呼ばれずして放置された私たちを残して。

「つて、なんか気迫に呑み込まれちゃったけど……」

放置組の一人、ピンクの髪色をした少女がため息まじりに言葉をもらす。

まあ、これが普通の反応だね。アーたんは相変わらず無表情のままだけ。

「ああ……結局のところ僕たちはどうすれば」

彼女の言葉に呼応するように、側に立っていた蒼灰髪の少年が戸惑いの表情を見せる。

《ⅤⅠⅠ組・戦術科》に《ⅠⅩ組・主計科》ってことは、本校のクラス数から考えて。「私たちは《ⅤⅠⅠ組》ってところかな」

「そのとおり。そなたら4名は少数ではあるが一つのクラスに属してもらおう。《ⅤⅠⅠ組・特務科》——この者、リイン・シユバルツアーが担任となるクラスにな」

最後のクラス発表から間もなく、私たちは菜園前の通路を經由して分校の片隅にある施設へと向かっていった。

「ほんとおつ、最近建てられただけあつて綺麗だね。あの滝の前の広場でお昼寝したら最高そう」

「風景がどうであれ、結局は寝るんですね」

「そのうち、アーたんにはお昼寝の極意を伝授してあげよう」

「いえ、遠慮しておきます」

私の誘いを即答で返したアルティナは、一瞬ではあるが前方を歩く私たちの教官に視線を向ける。それにつられて私も黒髪の教官を見つめ、

「あの人が私たちの教官かあ・・・絶対に」

「アーたんは渡さないよ。」

「心中で意思を固める。」

「・・・なにか言いましたか?」

「え、ううん、なにも」

こちらを不思議そうに見つめるアルティナの問いかけに、虚を突かれた私は若干焦つたように彼女から視線を逸らす。私の仕草にさらに不思議そうな表情を浮かべるアルティナだったが、それ以上踏み込む様子もなく先に見える巨大な施設を見上げる。

「着いたぞ」

最前を歩いてきた軍人教官の男性が到着を告げる。

「この場所は一体……そもそも学院の施設なのか？」

蒼灰髪の少年が怪訝な表情を浮かべながら前方の建物を見つめる。

「敷地内に立つてるあたり、そんなんじゃないかな」

と言ったものの、この風貌からして”立方体のなにか”とまでしか自分でも分からな
い。手の込んだそうな造りを見る限り、ただの施設ってわけではなさそうだけど。

立方体の施設の在り方について思考を巡らせていると、軍人教官がこちらに振り向
く。

「現在、戦術科と主計科はそれぞれ入学オリエンションを行なっているが。V I I
組・特務科には入学時の実力テストとしてこの小要塞を攻略してもらおう」

その唐突な発言の内容に生徒はもちろんのこと、担当教官であるリインでさえ動揺を
隠せないでいる。

あの教官の反応、彼も知らされてなかったんだ。でもどうして入学テストのことを把
握していないのかな。単なる情報の流れミスか、もしくは彼に知らせてはまずいも
のなのか。

「攻略ってことは、この施設の中はダンジョンってことですか？」

私の質問に、軍人教官ではなく彼の隣にいた白髪の老人が答える。

「ああ」

「じゃあ、実力テストの過程として” 私たちを阻害する存在” がいるということですよ
ね」

「阻害する、存在・・・？」

ピンク髪の少女が不思議そうに顔を傾ける。

「もちろんそういった存在は配備されている。なにせ、実験用の特殊訓練施設なのだからな。内部は導力機構による可変式で難易度設定も思いのままー存在にしては魔獣などが放たれている」

魔獣という言葉に、ピンク髪の少女と少年が驚いた様相を見せる。

対する私は無意識に、笑みを浮かべていた。

「ちよ、ちよつと待ってください！　黙って付いてきたら勝手なことをペラペラと……
こんなクラスに所属するなんて一言も聞いていませんよ！」

うーん、クラス分けつてのは私たちが関与できることじゃないけど、魔獣が関わってくるなら話は別か。一般のクラスで魔獣を相手にする学院なんてないだろうし。

「適性と選抜の結果だ、クロフォード候補生。不満ならば荷物をまとめて軍警学校に戻っても構わんが？」

彼女の不満まじりの発言に、軍人教官は表情一つ変えず厳しげな言葉を発した。少女はまだ言い残したことがあるといった感じだが、ただ悔しがるようにその場に立ち尽くす。

「この教官は結構厳しめだね。普段からそんな感じで疲れないのかなー」

「なにが言いたい、コルテス候補生？」

「いえいえ、ただの独り言ですから気にしないでください」

睨みつけるような視線を避けるため、アルティナの背後へとさつと隠れる。

うーん、やつぱ苦手だ。この人。

盾にされ明らかに不満の表情を見せるアルティナに、ごめんと小さな声で謝る。そんな私たちをよそに、老人となにやら話ごとをしていたリインがこちらへと振り返る。軍人教官と私たちの異様な雰囲気困惑ぎみな表情を浮かべるリイン。

「どうしたんですか、ミハイル教官」

「なんでもない。ただの教官と生徒のスキンシップだ」

ミハイルと呼ばれた教官の返答にまだはつきりとしなないリインだったが、

「ええい、いつまで無駄話をしている。さっさとテストを始めるぞ」

退屈そうにこちらの会話を聞いていた老人が、急かすように言ってきた。慌ただしく物事が動く中、皆決心したように建物の中へと歩み始める。

虚しき英雄譚の序章 vol. 3

立方体の建物は外見から察していたとおり、いかにも複雑そうな構造をしていた。前方へと抜ける道の先には昇降機らしき扉が見え、右端から階段を登った先にある一室では、先ほどの老人とあの金髪の少女がテストに関する会話をしている。

「それで、概要についてどこまで知っているんだ？」

建物の中央付近で立ち止まった私たちが内装を見回っていると、ラインがふとアルティナに声をかける。

「詳しくは何も。地上は一辺50アージユの立方体、地下は拡張中という事くらいです」
対するアルティナは無表情のままさりりと答える。

この施設のことを以前から……というか、それよりー

「アーたんっ！　もしかして二人って知り合いだったの？？」

施設がどうこうより、彼らの関係のほうが最重要である。

私の驚きの表情に、なにか、と言わんばかりに首を傾げるアルティナだったが、項垂れる私を心配してか肩にそっと手をおき、

「何を思っただろうなっただかは知りませんが、とにかく大丈夫ですので」

「うう、優しいね・・・アーたんは」

その一言でかろうじて気を取り直した私は改めてリインに視線を向ける。

ライバルって思ってたけど、これは相当手強そうだね。でも、私も負けてられないよ。リインに向けて戦うぞと言わんばかりに睨みをきかせる。当のリインは私の一転二転する行動に困惑していたが、元の顔つきに戻った私を見てホッと息をはく。

「ハハ・・・なにはともあれ、解決してよかった。だがもしまだ悩みがあるのなら、俺でよければいくらでも相談にのってやるからな」

相談にのるって、その悩みの根源はあなた本人なんだけど。

「あ、ありがとうございます、シユバルツアー教官」

複雑な気持ちなんだけど、ここは素直に謝っておこう。さっきの表情、教官としてやはり心配だったんだろうし。

「さて、”準備”が整うまでの間、互いに自己紹介をしておこう。申し訳ないが、到着したばかりで君たち3人のことは知らなくてね」

入学式当日に学院入りって、ほんと英雄は大忙しなことだ。

「俺はー」

「必要ないでしょ」

名乗ろうとしたリインだったが、それを制止するように少女の声が遮った。

「《灰色の騎士》リイン・シュバルツァー。学生の身でありながら1年半前にあった内戦を終結させ、クロスベル戦役でも大活躍した若き英雄。帝国のみならずクロスベルでも知らない人はいないってほどの有名人じゃないですか」

淡々と語るピンク髪の少女だったが、リインを見る目は憧れなどとは程遠い不満そうな感じだった。

「へえ、私たちと同じ頃でそんな破茶滅茶なことを・・・さすがですねシュバルツァー教官」

「そんなことはないさ。あの内戦もクロスベルでの戦いも数多くの人に支えられて成せたことだからな。俺一人が英雄視されるのは間違いないんだが」

謙遜するリインの表情は一瞬だが少し寂しげな感じを漂わせた。それを感じ取ったアルティナがなにかを言おうとしたが、私と視線が合うと目線を逸らし口を閉ざした。

「壮大な英雄譚に隠れる影あり、か。」

「まあ、改めて紹介させてほしい。リイン・シュバルツァー。ツールズ士官学院・本校出身だ。先月に卒業したばかりで、ここ第II分校の新米教官として本日赴任した。座学では歴史学を教えることになる」

「歴史学ですか。私歴史大好きなんですよ」

「そうなのか。ちなみにどんどころが好きなんだ？」

「まあ、歴史がどうこうというより、その事象の根源を知ることが一番です。以前の内戦だつて四大名門の一角であるアルバレア公とカイエン公の暴走だと聞きましたが、単なる二君の暴走であれほどの事態が起こり得るのか不思議なんです。まるでそれが確実に起こるとされ、あらかじめ準備されていたと思えてしまうほどに」

「・・・な、なにを言つて・・・」

「ふむ・・・」

私が語つているうち、少女と少年が不思議なものを見るような目でこちらを向いていた。リインとアルティナもなにか考え込むような仕草が見えた。

「あはは、脱線しちゃつてました。えつと、自己紹介でしたよね、私はシエル。シエル・コルテス」

紛らわすように笑いで誤魔化そうとする私は、次だよ、と少年に視線で合図を送る。私の仕草を察知した少年は咳払いをし、

「では、自分も。クルト・ヴァンダール、帝都ヘイムダル出身です」
軽く自己紹介を済ませます。

ヴァンダールつてあの・・・あれ、でもあの人とは似てないような。

「ヴァンダールつてたしか皇帝を守護する立場にあつた家系だよね」

「ああ、つい最近まで・・・だが」

私の指摘に答えたクルトはなにか思い込むような表情を見せる。

「デリケートな内容だったかな。だって、もう守護できる立場じゃないからね。」

「僕のこととは置いて、シユバルツァー教官に聞きたいことがあるのですが。その眼鏡が伊達でしたら、あまり似合っていないので外したほうがいいですよ」

「ぶっ……あはは……」

クルトの指摘に言葉を詰まらせたリインを見て、ピンク髪の少女が笑いを堪えずにいい。

「まあ、それなりに需要はありそうですが」

「私はいいい線いってると思うけどな。どこにでもコアなファンはいるもんだよ」

アルティナの微妙なフォローと、彼女に続くように私のフォロー（？）にリインは面映ゆい表情を浮かべる。

「ユウナ・クロフォード。クロスベル警察学校の出身です。正直、よろしくしたくないけど……それも行かないのでよろしく」

自己紹介というのにどこか不満に満ちた雰囲気を感じさせる少女、ユウナ。

さっきの言動と、教官に対する態度。クロスベル出身だからこそ……いや、他の原因があるかな。

「刺々しいねえ、ユータん」

「そんなことは……てつ、ユーたんってなによ!?？」

「ユーたんはユーたんだよ。可愛いじゃん」

「か、可愛い……?？」

私の真剣な眼差しに戸惑いの表情を露わにしつつ、『可愛くない』と内心で確信するユウナ。隣に立つアルティナはやれやれといった様子で軽くため息をつく。

「はあ……最後は私ですね。アルティナ・オライオン。帝国軍情報局の所属でした」

紹介の最後にあつた異質な単語に、クルトとユウナが二人してキョトンとした顔になる。

それもそうだね。こんな幼げな少女が、帝国の影に潜む厄介な組織にいた事を聞けば。

しかし、私にとってみればただ単純な考えが浮かんでくる。

「影があるって萌えるよね、アーたん」

「どうしてそういう思考になるのですか」

アルティナの呆れるような視線がジトーツと刺さってくる。

「まあ、ここに入學した時点で所属を外れた事になっていますので、どうかお気になさらず」

と言うアルティナ。ユウナとクルトはなにか言いたげにお互いを見合っていたが、次

の瞬間に室内に別の声が木霊する。

『お、お待たせしました！　アインヘル訓練要塞、LV0セッティング完了です！』

”準備”の完了を告げる少女の声に続き老人の声が聞こえてくる。

『自己紹介とやらは済んだようだな。なら早速、テストを開始させてもらおうしよう。LV0のスタート地点はB1、地上に辿り着けばクリアとする』

『は、博士……？　その赤いレバーって……あ、あの博士！』

アナウンスの最中、少女がなにやら焦るように博士に言いかけている。向こうの状況がわからずにいる私たちは聞こえてくる声にただ耳をすますだけしかできないのだったが、リインが唐突に険しい顔つきになり、

「みんな、足元に気をつけろ！」

警告するように言い終わると同時に、皆が立っていた場所の床が落とし穴のように傾いたのだ。突然のことで反応が遅れたユウナとクルトはなすすべもなく体勢を崩してしまい、そのまま滑るようにして穴の中に吸い込まれていった。

「いやはや、びっくりだね。まさか落とし穴とは」

落とし穴と化した床の端、ワイヤーのようなもので元の床に掴まった私は落ちていく二人を眺めていた。私だけでなく受け身をとったリインや、突如として現れた黒い物体に掴まったアルティナも二人して無事そのものだった。

「その物体、ずっとアーたんと一緒にだよ。憑かれてるかと思ったけど、それがアーたんの武装なんだね。情報局といい、ホント私を飽きさせないなあ」

「そういうシエルさんもやはり尋常ではないようですね。この落とし穴に關してもある程度予測できていたのでは」

「まあね。教官も心配かなにかを察したんですか」

「ああ。しかし、アルティナはともかく君はこの状況下に慣れているように見えるんだが」

「……勘が鋭いことで。でも教官、誰しも秘密はあるものですよ」

冷たく、これまでの気楽さを微塵も感じさせない声音で答えたシエルはワイヤーの接着部分を切り離すと、急な坂を勢いよく駆け下っていく。

「リイン教官、お願いがあります」

残された中、アルティナが口を開く。

「なんだ？」

「彼女のことは私に任せてください。おそらく、いえ……彼女の”影”に心当たりがありますので」

「……ああ、わかった。彼女のこと、俺もある程度気にかけておくがよろしく頼む」

頷いたアルティナはそのままゆっくりとした速度で穴の奥へと姿を消していき、リイ

ンもまた体勢を直し滑り落ちていった。

虚しき英雄譚の序章 Vol. 4

「ふんふつふんふん♪」

深くまで続く下り坂を呑気に口ずさみながら駆け下っていると、前方に二つの影が見えてきた。

「え……っ!?」

「……おいつ」

一足先に坂へと消えたはずの二人だと気づいたものの一瞬にしてすれ違うように追いついてしまう。

そのまま勢いを落とさず下っていくと、ようやく着地点がす視界に映った。

「よいしょ、つと」

穴の入り口付近の床は落下を想定してなのか少し柔らかな作りとなっているためか、勢いによる衝撃もなく着地できた。辺りを見回すと先ほどと同様に機械仕掛けの内装だが、地上の空間よりは少し狭く感じる広さである。

少しすると、背後で衝撃音が響いてきた。

振り返るとそこには、ユウナの下じきになるクルトという、ハプニングな光景が広

がっていた。二人とも落下の衝撃のせい意識が朦朧としており、一向に起きそうな素振りを見せない。

ツンツン……。

ツンツンツン……起きないな。

二人の軽く頬をつついてみるもやはり反応はない。ならー

「ユーたんにクルト君、ご飯の時間だよ」

二人のすぐそばにしゃがみ、朝食の支度を終えたお母さん風に言ってみたものの結果は同じであった。

おかしいな、私だったら速攻で意識復活するんだけど。

「こ、これは……」

「リイン教官のような不埒な状況になっていますね」

声に振り返ると、坂を滑り降りてきたリインが二人の状況にやや複雑そうな表情を浮かべていた。遅れて黒の物体と共に下降してきたアルティナも、リインに対して意味深な言葉をかけている。

「これっていわゆる“フラグ”ってやつかな？」

「私に聞かれても困ります。まあ、多少思い当たる節がないわけではありませんが」

そう言っリインの方に一瞬視線を移すアルティナ。視線に気づいたリインは頬を

かきつつ苦笑いを浮かべる。

「その不埒な状況にアータんは巻き込まれていないよね？」

「……」

「沈黙、かあ……アハハ」

「お、おい、目が笑ってないぞ」

「……うーん……」

そんなやりとりをしていると、ふとユウナが意識を覚ました。さらに下敷きとなつて
いるクルトも同じタイミングで意識を取り戻す。

そして同時に、お互いの状況に気づくのだった。

慌てた様子ですぐさま立ち退いたユウナに続き、やや落ち着いた感じで立ち上がるク
ルト。

次の瞬間、明らかに沸点まで上昇したかのように顔を真っ赤にしたユウナがクルトの
頬に張り手をかますのだった。

ドンマイだよクルト君。

「とにかく、全員ダメージはなさそうだな」

状況がどうであれ、ひとまず落ち着いた状況の中リインが第一声を発する。

精神的ダメージはダメージに入りますか、と言いたいところだがやめておこうかな。余計に気まずくなりそうだし。

「それではこれより、この小要塞の攻略を開始する。各自、武装を見せてくれ」
「つて、こんな茶番に本気で付き合おうんですか？」

リインの指示にユウナが少し驚いたかのような仕草を見せる。

「茶番程度でここまで施設は造らないんじゃないかな？」

「ああ、博士のことだ。決して茶番なんかでは済まないテストを用意しているだろう。俺たち5人の実力を測るために本当に魔獣を解き放っているみたいだ」

通路の奥を警戒するように見つめるリイン。彼の目線の先の方から小さくはあるが遠吠えらしき音が聞こえてきた。

「わかりました。自分はこれです」

リインの言葉に納得したように、クルトが自身の獲物を取り出した。それは、白を基調とした剣だった。両手にそれぞれ掴み持っているところを見ると双剣のようだ。使い慣れているかのように軽く剣捌きを披露するクルト。

双剣か……悪くない武器だね。

「次はユウナ、君のほうはどうだ？」

「勝手に話を進められているようで面白くないですが、私のはこれです」

ユウナが手にした武器は、トンファー型の警棒だった。しかし、よく見てみると単なる警棒というわけではなく、なにやら複雑そうな構造をしていた。

「これはガンブレイカーといって、クロスベル警備隊で開発された銃機構付きの特殊警棒です」

ガチャンという音を立て、警棒だった部分が逆向きに反転した。覗き込むように身体を傾けると、先端には確かに銃口らしきものがあつた。

「こうやってモードを切り替えることで中距離の範囲射撃になるんです」

「わかつた。遠近どちらにも対応できる武装、頼りにさせてもらおう」

「は、はいっ……当たり前です」

「……次はアルティナ、たのむ」

リインの指示に呼応するように左手を掲げたアルティナ。ユウナとクルトが一瞬戸惑った表情を浮かべる中、なにもなかったはずの空間に巨大な物体が突然現れた。

「な、な、な……」

「そういえばさつき、黒い影が一瞬見えたような……」

「クラウ＝ソラス。《戦術殻》という特殊兵装の最新鋭バージョンとなります。機密事項のため詳細は説明できませんが、それなりの戦闘力はあるかと」

二人が戸惑いから驚きの表情へと変わる中、平然と概要を語るアルティナ。彼女が言

い終えると、クラウソラスと呼ばれた物体は再び姿を消した。

気になるけど、さっきのこと以上はアータンも教えてくれなさそうだな。

「次はシエルさんです」

自身に向く注目を遮るかのように、アルティナが呟く。

あんな驚き一色の武装の後に紹介なんて気後れしそうだけど。

「私のはこれだよ」と

懐から取り出したそれは、手のひらサイズの小さな剣だった。先ほどのクルトの双剣より一回り小柄なそれは、剣というよりナイフといったほうが正しく思える代物だった。

「多重機構武装の”一”、一般的な小型ナイフだよ」

「多重機構、ということとは他に構造があるのか？」

ラインの指摘に、私はさらに懐から二本の棒と真四角の物体を取り出す。

皆が疑問の表情の中、その棒をそれぞれナイフの切っ先と手持ち部分に装着する。そして四角い物体はガチャガチャという音をたてて巨大な刃へと形をかえた。切っ先部分に取り付けた棒にあった窪んだ部分と刃を合わせると、身の丈ほどある大鎌へと変貌をとげた。

「ナイフが・・・鎌に変わった」

「これは“一”にあたる武装です。まだまだありますが、それはその時ってことで」
「しかし、さきほどのガンブレイカーもそうだが、複雑な武装は応用が効く反面頑丈さに欠けるんじゃないか」

「クルト君の指摘もごもつともだけど、それは打ち合えばの話で……一瞬でケリをつければ大丈夫なんじゃないかな」

ふと、私が見せた笑みにクルトが反射的に後ずさった。

いけないいけない、この子を持つと抑えきれないんだよね。

「なにはともあれ、一通り各自の武装について確認できたな。最後に俺の武装はこれだ」
ラインが手に持った武器は刀だった。それも帝国風の“剣”ではなく東方風の“刀”という。

「《八葉一刀流》の“太刀”……」

「アリオスさんがつかっていた……」

《風の劍聖アリオス・マクレイン》。いまは確か指名手配中だったつけ。彼を追いかける人たちに果たして彼を捕らえられるほどの実力はあるのかな。いや、彼らっていったほうがいいか。

「よし。それじゃあ攻略を始めよう」

ラインの合図ともいえる言葉に武装を展開し、皆が通路へと向き直る。

「現在B1、地上に出ればこの“実力テスト”も終了だ。実戦のコツ、アーツの使い方、ARCUSSIIの機能なども一通り説明していく。迅速かく確実に。ただし、無理はしないようにしつかり付いて来てくれ」

「やるからには全力を尽くします」

「こつちこそ、帝国人に負けてられないですし！」

「状況開始、ですね」

「ではでは、殺っちゃいましょうか♪」

皆それぞれに意気込みを掲げ、警戒しつつ通路の奥へと歩みを進めるのだった。